2019 年度　創造的な教育実践

1. ゼミの武蔵の実践

1-1. 学部横断型課題解決プロジェクト

経済学部助教　大熊 美音子

この授業は、2008 年度に正規授業となり、今年度で 12 年目を迎えました。

2019 年度は、前学期、後学期ともに１クラスを開講しました。前学期、後学期の学部・学科別の履修者数は次のとおりとなっています。内訳をみると、前学期は、経済学部が７名、人文学部が８名、そして社会学部が７名の合計 22 名、後学期は経済学部が４名、人文学部が４名、そして社会学部が９名の合計 17 名です。男女比を見ると、前学期は男性６名、女性 16 名（男性比率 27.3%）、後学期は男性４名、女性 13 名（男性比率 23.5%）で、女性の履修割合が例年と同様に多い結果でした（**表１**）。

今年度は履修者数がやや少なく、特に後学期には、経済学部と人文学部が各４名ずつとなったため、フェーズ１には２名でのチーム編成が生じました。２名という少ない人数が発表内容の質量に影響することはなかったものの、本授業のもうひとつの目的である、チーム活動での学びや成長機会の観点に限れば、チームワークの形成やコミュニケーションにおける葛藤の経験機会が十分になされず、２名という人数による限界がありました。この点は、次年度の課題と受け止める必要があります。

表１　2019 年度学部横断型課題解決プロジェクト履修生（学科・学年・学科・性別）

学科＼セメスター	前学期				後学期					
	2年次生		3年次生		1年次生		2年次生		3年次生	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
経　済	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
経　営	2	2	1	1	0	0	0	0	0	1
金　融	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
英語英米文化	0	1	0	3	0	0	0	0	0	1
ヨーロッパ文化	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
日本・東アジア文化	0	1	1	1	1	0	0	1	0	0
社　会	0	2	0	2	0	0	1	3	0	0
メディア社会	1	1	0	1	0	0	1	4	0	0
学年性別合計	3	7	3	9	1	0	2	9	1	4
履修生合計人数	22				17					

今年度は後学期において、次のような改善と新しい取り組みを行いました。

１）学部別事前課題レポートの追加

フェーズ２で CSR 報告書を作成するために、フェーズ１では各学部がそれぞれの課題テーマに取り組みますが、大枠の概念の理解から始まるフェーズ１の課題に学生が取り組みやすくするために、昨年度から「事前課題」として、CSR に関する指定図書を読むことを課しています。この全学部統一テーマに加え、後学期には、各学部別に課題図書を与え、合計２本のレポートを課しました。

その結果、後学期の学生の事後アンケートでは、各フェーズの課題をしっかり理解した上で取り組めたとの回答が得られました。また、中間発表の発表内容が総じて良い評価を得られたことも、この学部別事前テーマによって、課題の理解が一層進んだ結果である、と考えられます。

事前課題の各テーマは以下のとおりです。

＜統一課題図書＞

手塚貞治編著『コーポレートガバナンスの基本』日本実業出版社, 2017 内の７章・８章

＜学部別課題図書＞

経済学部：水口剛著（2017 年）「ESG 投資－新しい資本主義のかたち－」
日本経済新聞出版社　第６章・第７章

人文学部：佐藤健二・吉見俊哉編（2007 年）「文化の社会学」
有斐閣　第１部第１章・第１部第２章

社会学部：近藤久美子著(2017 年)「CSV 経営と SDGs 政策の両立事例」
ナカニシヤ出版　序章・PART Ⅰ（第１章～第４章）

２）フェーズ１の学部別課題の追記

社会学部の課題内容に「SDGs の考え方との関連について検討する」の文言を追記しました。

３）メディアリテラシーと資料検索方法の学習機会の提供

論文や資料の検索方法や Office のスキルの修得度合いは、履修生の学部学科や学年、ゼミでの経験機会などによってばらつきがあるため、本授業では教員の講習による学習機会を設けるなど、学生のスキルの総体的、均質的な向上を目指しています。

①Office スキルの修得については、担当教員によって、CSR 報告書作成に必要な Publisher の講習を実施するほか、今年度後学期は専用 SNS のライブラリー機能を利用して PowerPoint、Word の使用方法の情報を共有し、常時閲覧を可能にしました。各フェーズの報告会では、報告書やプレゼンテーションのスキルが年々向上しているとの評価をいただいていることからも、これらの取り組みの効果が表れていると考えることができます。

②論文資料の検索方法については、後学期のフェーズ１の早い時期に担当教員によるガイダンスを行いました。これは、特にフェーズ１での資料検索に有効活用され、発表内容のクオリティの向上に反映されたと考えられます。

これらの教員による講習について、一定の効果を得られている反面、改善すべき点として、教員から学生への一方的な講義型であったことが挙げられます。そのため、終始学生が受け身の印象がありました。来年度以降も継続して行う際には、教えるだけではなく、履修後のアウトプット課題を具体的に与え、積極的な実践につなげるまでを見守りたいところです。

４）ディプロマ・ポリシーをガイドブックに明記

本授業における学生の成長の指標は、これまで経済産業省推奨の「社会人基礎力」によって測るしくみを構築していますが、これらが本学のディプロマ・ポリシーに如何に則しているかについて明確にはされていませんでした。後学期より、ガイドブックに明記し、本授業に対する学生の意識づけと、本学の建学の三理想に対するコミットメントを強化しました。今後も、シラバスは当然ながら、ガイダンスの時点から両者の関連性について十分に説明を行うことで、学生の意識への浸透を長期的視点で図っていきたいと考えています。

５）専用 SNS 上に「議事録グループ」を作成

専用 SNS 上では、日記の共有やチーム間、企業とのやり取り、事務連絡などのコミュニケーションが行われますが、後学期からは、授業中・授業外の全活動の記録をチーム間で共有することを目的として「議事録グループ」を新しく稼働させました。これまでは教職員が各チー

ムの進捗を確認する目的でのみ、議事録を提出させていましたが、この取り組みによって、チーム相互のモチベーションの向上に効果がありました。お互いの良い取り組みをベンチマークするほか、相互に進捗を共有することによって組織全体に規律性と計画力が生まれ、本授業全体の活性化にも貢献しました。これは前学期の学生の発案を活かしたものであることも意義深く、「学生の自発性」によって本授業が形成されている好例と考えられます。

この授業は２つの柱から成り立っており、一つが、課題提供企業の CSR 報告書の作成、もう一つが社会人基礎力の育成と自己評価能力を高めることです。

表２は、後者の社会人基礎力に関するデータになります。前学期と後学期を合わせた期間（通年）における履修生全員の平均値を見ると、履修前（事前評価）と履修後（事後評価）の間で最も伸びた能力は発信力であり（1.5 ポイントのプラス）、最も“伸びなかった”能力は規律性でした（マイナス 0.0 ポイント）。この規律性は事前評価の段階で、12 項目の中で最も高かったこと（事前評価で 7.8 ポイント）にも注目しておく必要はあります。これは、昨年度も同じ傾向がみられました。つまり学生の規律性は“伸びなかった”のではなく、この横断ゼミを通して、まず「規律はなぜあるのか」「何のために守るのか」といった他者との関係性における考察と理解ができたことによって、正しく自己評価ができるようになった結果であると考えられます。

社会人基礎力は、12 の要素に分かれていますが、大きくは、前に踏み出す力、考え抜く力、そしてチームで働く力の３つのカテゴリーに分かれています。この３つのカテゴリーで見ると、考え抜く力は事前評価が低く、前に踏み出す力は上昇幅が一番大きかったという傾向が見られます。受講生が横断ゼミを通じて、社会人基礎力の向上を実感し、学部ゼミでの活動や学外での活動を充実させたものにしていくことが期待されます。

表 2　社会人基礎力の事前・事後自己評価【2019 年度履修生】（学生による自己評価）

年度		2019 年度		
カテゴリー/要素		事前評価	事後評価	差異（事後-事前）
通年⑫要素平均		6.6	7.6	1.0
1. 前に踏み出す力（通年）		6.5	7.6	1.1
①主体性	前学期	7.1	8.2	1.1
	後学期	7.5	8.2	0.7
	通年	7.3	8.2	0.9
②働きかけ力	前学期	5.6	7.0	1.4
	後学期	6.4	7.4	1.0
	通年	6.0	7.2	1.2
③実行力	前学期	6.3	7.1	0.8
	後学期	6.4	7.7	1.3
	通年	6.3	7.4	1.1
2. 考え抜く力（通年）		6.2	7.1	0.9
④課題発見力	前学期	6.5	7.6	1.1
	後学期	6.4	7.9	1.5
	通年	6.5	7.7	1.2
⑤計画力	前学期	6.1	6.5	0.4
	後学期	5.8	6.4	0.6

	通年	5.9	6.4	0.5
⑥創造力	前学期	5.7	6.9	1.2
	後学期	6.6	7.2	0.6
	通年	6.1	7.1	1.0
3. チームで働く力（通年）		7.0	7.9	0.9
⑦発信力	前学期	6.1	7.5	1.4
	後学期	6.1	7.6	1.5
	通年	6.1	7.6	1.5
⑧傾聴力	前学期	6.9	8.4	1.5
	後学期	7.5	8.8	1.3
	通年	7.3	8.6	1.3
⑨柔軟性	前学期	7.3	8.2	0.9
	後学期	7.0	7.5	0.5
	通年	7.2	7.9	0.7
⑩状況把握力	前学期	6.5	7.7	1.2
	後学期	6.6	8.2	1.6
	通年	6.5	7.9	1.4
⑪規律性	前学期	7.8	7.8	0.0
	後学期	7.9	7.8	-0.1
	通年	7.8	7.8	0.0
⑫ストレスコントロール力	前学期	6.6	7.8	1.2
	後学期	6.5	7.8	1.3
	通年	6.6	7.8	1.2

＊表は小数点第 2 位以下四捨五入

今年度（2019 年度）に課題を提供いただき、授業に協力していただいた企業は、株式会社大川印刷、株式会社ライクス、株式会社西尾硝子鏡工業所、南富士株式会社の 4 社です。毎年ご協力くださる企業には、CSR 活動の先進企業としてしばしばメディアに取り上げられている企業や、社会課題の解決を自社の戦略課題の 1 つとして位置づけ、より積極的な取り組みを行っている企業も多くあります。今回は、すでに CSR だけでなく SDGs に先進的に取り組み地域を牽引している企業、大田区から世界に技術力を発信する企業、屋根工事会社でありながら社会課題の中に市場を創出するという事業活動の実態のなかなか見えにくい企業など、何れも学生には挑戦的な取り組みとなりました。特に、ある企業の本質的な部分であった「教えない教育（LEARN 型の学び)」に触れられたことは、この横断ゼミにとって重要な成果でした。学生の学びに対する姿勢は当然ながら、教員の姿勢についても、横断ゼミの在り方についても意義深い経験となりました。

協力企業の担当者様は総じて、横断ゼミを通して本学学生を高くご評価くださいます。毎年、歴代の協力企業（一部上場企業を含む）による採用実績が途切れないこともその成果と考えられます。授業後の、企業へのアンケート調査には、「学生の報告書やプレゼンテーションを、実際に社員教育の教材として活用している」、「自社が社会からどう見られているか新しい気づきを得られたことを大変満足した」などが挙がっています。また、後学期の協力企業からは、今回の学生による新製品開発の提案に対し、現在その実現に向けて実際に始動されているとの報告も受けています。将来、武蔵大学との共同開発製品の発表もあり得るかもしれません。この

ように横断ゼミの取り組みが、企業や社会に具体的な貢献をもたらしていることは、成果のひとつと考えられます。

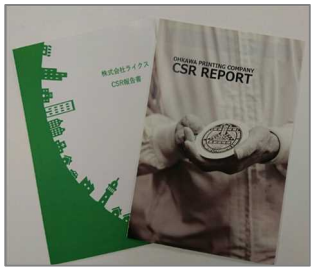
今年度も課題提供企業の選定にご協力をいただいた、東京商工会議所中小企業部の方には、後学期中間発表会に臨席をいただきました。そこで学生に対して、日本の経済の現代史を紐解き、中小企業の存在意義の重要性についてお話しいただいたことで、学生がより身近に企業を感じ、社会の仕組みを知る糸口を見つける、効果的な機会の提供ができました。東京商工会議所様からも、横断ゼミの主旨に対しては多大なご理解をいただいています。

また、今年度もプロジェクト終了後の「振り返り」の授業内容を拡充して実施しました。これまでも当プロジェクトでは、「振り返り」のプロセスを重視し、キャリアコンサルタントとの面談や履修生間の相互フィードバックを実施してきました。様々な視点から、ポジティブ、ネガティブ両面を丁寧に徹底して振り返る作業は、この「振り返り」こそが成長において重要なプロセスであることを、学生たちに気づかせることを意図しています。自身の成長において他者の存在がいかに重要で貴重なものなのか、コミュニケーションの意味について認識を新たにした学生は多く、社会における企業の姿と、組織における自己の在り方を重ね合わせた、複合的な理解を促す授業であると言えます。

最終回の授業では、これまでの「振り返り」を未来にどう役立てていくのかを視野に、最後のチーム活動を行います。そこに、過去の履修生をゲストとして招待し、横断ゼミ終了後の学生生活や就職活動にどう役立てたのかについて話してもらうことが恒例となっています。履修学生にとって「自分の未来像」を重ねる対象である登壇者から、横断ゼミで培った様々な力を就活や卒業論文に発揮できた成功経験が、「自分の言葉で」語られました。「横断ゼミ」という同じ経験を共有した学生の力強い言葉は、親近感と説得力があり、この時間は、このプロジェクトのスピリットが学生間で継承されていく、重要な機会となっています。

このように、横断ゼミで学生自身が最も成長を実感することとして、「これまでの知識を自ら積極的に深め、応用することができるようになること」が挙げられます。横断ゼミは、大学での学びと社会での実践を繋ぐ、まさに「横断」の役目を果たしています。今回実際に、前年度のあるチームが自発的に再結成をし、外部の大会「社会人基礎力グランプリ大会」に出場し、履修後の１年間についての考察を披露しました。また現在、後学期履修の学生たちは、チームの垣根を越えて再結集し、「学生の力で横断ゼミを広めよう」と、各学科の専門分野を活かした活動を進めているようです。このようにして、学生たちの横断ゼミでの経験は、培った能力を柔軟に発揮できる場を学内外に積極的に求めて、自らの力で新たな行動を起こすことに着実につながっています。

授業中の様子（後学期）



学生が制作した CSR 報告書（前学期）

最終報告会（前学期）

1-2. ゼミナール対抗研究発表大会（経済学部）

経済学部教授　松川　勇

＜2019 年度「ゼミナール対抗研究発表大会」について＞

本学のゼミナール連合会が主催する経済学部・ゼミナール対抗研究発表大会（通称「ゼミ大会」）は、10 年以上続く「ゼミの武蔵」を代表するイベントの１つとなっています。本年度においては 2019 年 12 月 14 日（土）に開催し、31 チームが７つのブロック（経済ブロック、経営ブロック、経済経営 A ブロック、経済経営ブロック B、経営ブロック B、金融ブロック、金融会計ブロック）に分かれ、20 分間のプレゼンテーションを通して日頃の研究成果を競い合いました。

また、昨年度に引き続き、同窓会企画によるチャレンジ枠というブロックを設けました。このチャレンジ枠では、通常のブロックと比較して応募要件を緩め、学部内から構成されたグループ・個人を対象としたもので、ゼミをまたいだチームも応募可能となっています。今年度は、計５ームの報告がありました。

各ブロックでは、その専門領域に応じて選出された４名の審査員が、①表現、②内容、③対応力の３つの観点から審査を行います。４名の審査員のうち２名は本学教員ですが、他の２名は実務界で活躍されている本学 OB・OG です。この点もゼミ大会の特徴の１つといえます。今回も厳正な審査の結果、各ブロックの優勝・準優勝チームが選ばれ、それぞれ賞状・賞金が授与されました。

ゼミ大会は発表のみに注目が集まりますが、それまでの準備期間で学生にとって多面的な教育的効果が見込まれます。発表テーマに関する専門的知識の習得、深化はもちろんですが、発表の準備段階では学生間での役割分担や作業を通じて、チームワークや問題解決能力を養うことができる有用な機会を得ることができます。また企業等の実務・社会経験が豊富な OB が審査員として含まれているために、単純に学術的な正確性や理論的な理解と応用だけでなく、実社会への応用性、さらにはより広く理解を促すためのプレゼンテーション能力を要求されます。そのため、通常の講義やゼミナール活動のみでは得られない経験、学習の機会を得ることができると考えられます。

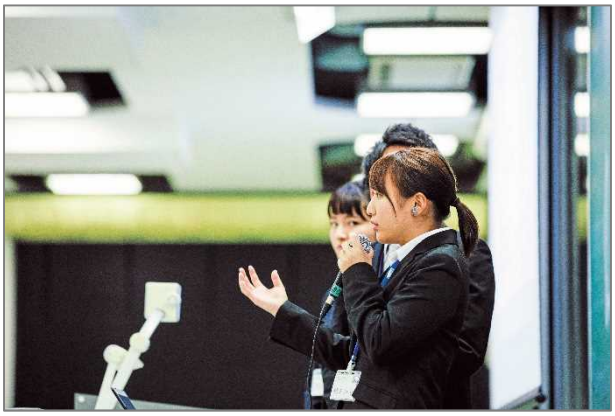
また本学のゼミ大会の大きな特色は、大会自体を学生自身が運営をすることにあります。ゼミ大会はゼミナール連合会が経済学部教員や大学スタッフ等のサポートのもと、自ら企画運営を行います。そのため、ゼミ大会での大会運営に関わった学生については、対外機関や関係者とのコミュニケーションが必要となり、大会準備の管理などを通じて、社会人として将来役立つスキルを養う場としても機能しています。

＜今年度の改善点と今後の課題について＞

前年度も課題となっていた参加ゼミナール数を増加させるという点については、今年度も出場辞退が相次ぎ、前年度の 36 チームよりも５チーム参加チームが減少することとなりました。参加チーム数の増加は、競争によって発表の質が上がること、また学生にとって大学行事としての意義も大きくなるため、今後も参加ゼミ数、チーム数の維持、及び増加を引き続き努力する必要があると考えられます。また、参加を辞退されたゼミは、同日に開催される他大学とのインゼミや学外コンテストへ出場されているようです。ゼミ大会を本学経済学部におけるゼミ活動の集大成のイベントと位置づけ、積極的な参加を求めるのであれば、その企画・運営をゼミナール連合会に完全に委ねるのではなく、当該イベントの認知度や大会としての価値を高める努力を学部として検討する必要があるように思います。

第二の課題として、外部の聴講者の増加を促す施策が挙げられていました。聴講者の大半は本学の学生となっている状況にあり、外部からの聴講者の方のご参加が少ないと緊張感が薄れ、大会自体から得られる学生の刺激も薄くなってしまいます。今年度は昨年度に引き続きオープンキャンパスでゼミ活動紹介などの企画を行い、外部へのアピールを図る工夫を行いました。また、Twitter などの SNS サービスを利用して学生が学外への発信も行っています。次年度はそうした工夫をさらに行い、外部の方に興味を持ってもらえるような広報活動を行っていく必要があると考えられます。

最後に主催するゼミナール大会の体制強化がここ数年の課題となっていましたが、昨年度の新入生への呼びかけが成功した結果、多くの学生が集まりました。ただし、今年度は委員長が年度中に急遽交代したこともあり、教務課や教授室との連携で課題が残りました。記録や引継ぎを徹底し、定型業務を安定化させることで、学生の選択に自由度を与え、自主的な活動を育てる仕組みづくりの必要性があると思います。



＜出場チーム、及び発表テーマ一覧＞

ブロック	ゼミ名	タイトル
経済ブロック	田中２	ＩＣＴ教育は実用的であり、効果的であるのか
	広田２	特定健康診査は医療費を抑制させることはできるのか
	二階堂２	女子教育とロールモデル
	大野Ａ	日本ノインバウンドの展望
経営ブロック	古瀬２	消費者心理とネットレビュー
	朴２	購買意欲を促すＳＮＳ発信とは ～発信主体が情報の信頼性に与える影響～
	目時２	あきる野で家族と作る唯一無二の思い出 ～林業の６次産業化～
	高橋徳２	働き方改革の成功要因とは何か
経済経営Ａブロック	松川１	小水力発電
	根元１	若者の政治参加
	高橋由１	完全子会社化発表時の親会社株価への影響
	広田１	Twitter は観光消費に影響を与えるのか？

経済経営Ｂブロック	吉田２	異次元金融緩和政策の理論分析
	根元２	幸福度に関する研究
	山崎２	これが未来の働き方！～リモートワークでも安心して働くために～
	松川２	屋上貸し菜園による屋上緑化
	森永２	そうだ、ベンチャーに行こう。 ～越境学習で学んだことを組織に還元させるには？～
金融ブロック	山本Ｂ	Ｐｅａｃｅ ｂｅｇｉｎｓ ｗｉｔｈ ａ ｓｍｉｌｅ ～ 日 本 を 救 う 笑 顔 企 業 ～
	茶野Ｂ	ESG の取り組みと収益性の関係性
	徳永２	経営戦略の変更をファイナンスで評価する ～企業価値に好影響を与える経営戦略とは？～
	大野Ｂ	仮想通貨のポートフォリオ運用への利用
	神楽岡２	金融の諸問題とその解決策の提示
経営金融ブロック	徳永１	マ ー ク ・ ト ゥ エ イ ン は 予 言 者 か ？ － ま ぬ け の ウ ィ ル ソ ン の カ レ ン ダ ー 1894 年 版 の 検 証 －
	森永１	サ ー バ ン ト リ ー ダ ー シ ッ プ に よ る モ チ ベ ー シ ョ ン の 影
	山崎１	（ で き る だ け ） 失 敗 し な い 転 職 の 研 究
	高橋徳１	アントレプレナーシップが地域活性化に果たすべき役割 －「外貨」獲得も「域内」循環も－
	伊藤誠１	３年後離職率を影響する要因の分析
金融会計ブロック	髙橋（由）２	会 計 処 理 か ら 見 え る 日 本 の フ ラ ン チ ャ イ ズ ビ ジ ネ ス
	海老原２	監 査 の 質 の 利 益 マ ネ ジ メ ン ト へ の 影 響
	山本Ａ	環 境 投 資 ～ ＳＤＧｓ と こ の 先 の 未 来 ～
	茶野Ａ	日 本 企 業 の ＫＰＩ の 見 直 し ～ ＲＯＩＣ 経 営 と ＲＯＥ 経 営 ～
チャレンジ(同窓会)枠	海老原ゼミ	女 性 役 員 の 登 用 と 利 益 マ ネ ジ メ ン ト
	インドか インド以外か。	イ ン ド 進 出 企 業 へ の 投 資 ～ 今 、 イ ン ド が ア ツ い 。 ～
	人材	人 的 資 源 と 株 式 価 値 の 関 係
	個人参加	若 者 の 「 貯 蓄 」 か ら 「 投 資 」
	ホラクラシー	ホ ラ ク ラ シ ー 組 織 か ら 見 る 、 肩 書 と モ チ ベ ー シ ョ ン の 関 係

1-3. 卒業論文報告会（人文学部）

人文学部教授　高橋 一樹

2019 年度の人文学部卒業論文報告会は、３つの学科ごとに１月 30 日（木）午後１時から開催された。３学科それぞれで異なる会場で報告会が並行して進行されることから、部分的に参加したにすぎないものの、全体を俯瞰するなかで、FD の観点から気付いた特徴的な点を以下に述べたい。

指導教授の推薦をもとに各学科で選ばれた報告者（４年生）の卒業論文は、学術的に内容が優れたものに限らず、学科によっては、テーマの設定や分析の視点・方法などにとてもユニークな点がみられるものも含む。オーディエンスの中心となる３年生が、これから卒業論文の執筆を本格化させていくうえで、柔軟な思考を大切にしてもらうことを期待しての配慮でもある。報告者にとっても、みずから執筆した卒業論文の顕彰という意味合いだけでなく、100 名近いオーディエンスを前に、限られた時間内で論文のポイントを伝えるべく、さまざまな工夫を凝らしたプレゼンテーションの機会を得ることになる。さらに、報告学生と聴講学生とのあいだには、ごく限られた時間ではあるがディスカッションも行われ、本学の重視する日常的なゼミナールの延長線上に、インタラティクティブな学修の効果が期待されている。

報告者となる４年生は、いずれの学科でも、事前に準備したハンドアウトとパワーポイント、さらに自身の音声やゼスチャーといったメディアを複合的に駆使して、卒業論文の要点をアピールしていた。ハンドアウトとして配布されるレジュメは、おおむね A3 で１枚（表裏）におさまる適切な内容にまとめられており、文字情報だけでなく、報告者が分析を加えた画像資料なども適宜取り込まれている。１年次のいわゆる基礎ゼミナールからスタートするゼミ学修の積み重ねが効果を発揮している。しかし、パワーポイント画面の内容は、多くの報告学生が少なからざる改善の余地を残していたといわざるを得ない。

まず、プロジェクターから映し出される文字が小さくて、オーディエンスからは読めない。モノや地図、風景、建築物などの画像も同様であるケースが多い。短期間で準備したパワーポイントがほとんど効果を発揮していないとの印象を強く受けた。これは、パワーポイントによるプレゼンテーションのスキルが、人文学部では、学生たちにあまねく適切なかたちで指導できていないことに由来するものと推測される。

人文学部のディプロマ・ポリシーには、「４．個人またはグループで主体的にテーマを選んで調べ、データの整理・分析・総合を行い、文章を論理的に構成し、現代的ツールを用いて能動的に表現し、自説の客観性を高めるために対話する力を身につけていること」とある。このうち「現代的ツールを用いて能動的に表現」する能力については、優秀な卒業論文を執筆しうる学生（「文章を論理的に構成」する力量をもつ）であっても、必ずしも十分に習得できていない場合があることが、まさにディプロマ＝卒業認定・学位授与のコアとなる卒業論文の報告会で象徴的に可視化されていた。

報告者によるプレゼンで音声による説明とならんで重要な役割をはたすべきパワーポイントのコンテンツ制作が、オーディエンス側の内容理解にほとんど益していない、と危惧される状況は、報告者＝制作者側のスキル不足の問題にとどまらない。それは、報告者である４年生の側に、同じくディプロマ・ポリシーにある「自説の客観性を高めるために対話する」という姿勢が、十分に意識されていない可能性をも示唆する。加えて、優秀な卒業論文を執筆しうる学生だけに、学科ごとに 20 分ないし 25 分の報告時間にあわせて、口頭での報告内容を周到に文

章化して、会場で読み上げるケースもよくみられたが、これも長時間にわたって聴講する側に内容理解を促進するプレゼンテーションの洗練された方法とはいえないであろう。

要は、卒業論文報告会を開催する“ねらい”の柱である、学生間をおもな担い手とする双方向的な「対話」の実現が、各学科の積年の努力にもかかわらず、十全に果たされていないと考えられる。報告後のディスカッションにおいても、沈黙の時間が続き、仕方なく教員が手を挙げる機会が多くなるのも、同根の現象と考えられる。英語英米文化学科の報告会では、聴講する学生たちがゼミ単位にまとまって着席し、卒論の報告が終わるごとに質問をペーパーに記すべく、ゼミのグループワークのような時間が設けられていた。人文学の研究は個の確立が不可欠とはいえ、そうした学生たちの意思表明をしやすい環境をつくる工夫も、他学科では必要であろう。

さらに学科内でも、単一の会場で各報告を羅列的に行うのではなく、オーディエンスの興味関心により近い報告が選択的に聴講できるよう、分野やテーマに配慮しつつ、会場を分割して開催するなどの改革案も検討されていると聞く。卒業論文報告会についても、学生を交えたFD研修の際に、その学修効果をより高めるための討議が望まれる。

最後に、今回の卒業論文報告会における学科ごとの卒論題目は以下のとおりである。

【英語英米文化学科】
What Does MIYAGE Mean?
イギリスの女性ファッションにおけるジャポニスムー開国から20世紀初頭に起きたキモノブームに至るまで
セレブレーションの危険性とは何か
　―ウォルト・ディズニーのテーマパーク思想とアメリカ合衆国の都市計画
The Polluted Thames in the Victorian Era: The Changing Images of the River as Seen in Punch.
Ideal Form of Affirmative Action: How Do Racial Minorities Break out of Poverty in the Modern Society.
特定非営利活動法人グッドの海外ボランティア体験がグローバル人材の育成ならびにコミュニーション能力の向上に果たす効果について
Why Was Lupin Ⅲ Able To Be Free?: Studying His Freedom from the Viewpoint of Hegel.
ヴィクトリア朝イギリスの娼婦と江戸時代後期日本の遊女の社会受容比較

【ヨーロッパ文化学科】
キリシタンの日欧交流　ー受け継がれた信仰と文化
キルケゴールの人間観と信仰
ナチズムとキリスト教　ードイツ教会闘争の光と陰
歴史主義建築の役割と功績
能動性を希求するヒロインたち
　ードイツオペラに見る女性の生きかた
『失われた時を求めて』におけるアルベルチーヌのイメージー動物と海の比喩から見たアルベルチーヌ
同性愛と近代欧米社会
子どもと共和国ー近現代フランスにおける家族の変化
日本国憲法改正草案における緊急事態条項が抱える危険性
　ーヴァイマル憲法の緊急権濫用と併せ見て

【日本・東アジア文化学科】
「ゴジラ対ヘドラ」に見る公害報道
福沢諭吉の「独立」思想
軍隊小説『遁走』における「笑い」の分析・考察　―安岡章太郎『遁走』論
大久保利通の目指した政治体制
扇獅子について
災害と大衆娯楽　―八甲田山雪中行軍遭難事件 117 年間を追って
カリブ海の開拓者たち　―ドミニカ移民は「棄民」だったのか
標準語の制定、恒常化への過程　―明治・大正期の新聞からの考察
天皇による自然支配

1-4. シャカリキフェスティバル（社会学部）

社会学部教授　矢田部 圭介

シャカリキフェスティバルは、社会学部の卒業論文・卒業制作の成果を発表するための機会として 2009 年度からはじまり、本（2019）年度で第 11 回となりました。「シャカリキ」という言葉には、「社会学の力」という意味と「がむしゃらに頑張る」という意味とがこめられています。また、競うというよりも、多様な成果をおたがいに披露しあう場という意味合いをこめて「フェスティバル」と名づけられています。

本年度のシャカリキフェスティバルは、2020 年１月 30 日（木）に、１号館の大教室を利用し開催されました。３つの会場（1101・1001・1002 教室）で、それぞれ３部会ずつ合計９部会が開催され、卒業論文 21 点、卒業制作５点、あわせて 26 点の発表と質疑応答が行われました。

本年度も、社会学部の３年生と４年生を中心に 500 人をこえる参加者がありました。また学生の卒業研究で調査や取材を受けてくださった方や、発表者のご家族など、数名の学外からのお客様もありました。

本年度は、通常の発表と質疑応答に加えて、「個別 Q&A」の機会を設定しました。例年、質疑応答だけでは物足りず、もっと詳しく個々の研究について尋ねたい、という希望が寄せられているのを受けてのことです。今回は、ひとつの部会が終了したあとの休憩時間をすこし長くとり、その間、個々の発表者に会場に残ってもらって、それぞれ個別に質問やコメントをうけつけるかたちで実施しました。熱心な学生が、発表者に、調査や制作の詳細を尋ねたり、質疑応答では十分に話せなかったコメントを伝えたり、またそれらに対して発表者が丁寧に応えたり、といった様子がそこここで見られました。

こうしたやりとりの中心をしめているのは、やはり３年生だと思われます。本年度、３年生がシャカリキフェスティバル終了後に提出したコメントシートには、例えば、「取材やインタビュー調査などに非常に時間をかけ…ていると感じ、どれだけしっかりとした調査が行えるかが…卒業論文のできに直結すると強く実感した」と、社会学部の卒業研究における調査や取材の重要性を再認識したようなコメントがありました。また、自分が卒業研究で研究しようとしているのと同じようなテーマの発表をきいた３年生は、コメントシートに、「自分も行おうと考えていたことなので参考になることが多かった。〔発表者の研究をふまえて別の問題〕との関連性を調べてみるのもおもしろいと思った」と書いており、自分の卒業論文の内容へのヒントを直接受け取っていることも分かります。このようにシャカリキフェスティバルは、とくに、３年生にとっては、ちょうど具体的に準備を始めたところの卒業研究への動機づけにもなりヒントにもなる、非常に重要な機会だといえるでしょう。

もちろん、３年生だけでなく、質疑応答では、１・２年生からの発言も見られましたし、何より４年生にとっては、シャカリキフェスティバルは、ゼミごとに自分たちの仲間の発表を応援し祝う、卒業前の大事なイベントになっています。

さらに、じつは教員にとっても、シャカリキフェスティバルで、自分のゼミ以外の学生の卒業研究に触れ、そこから読み取れる他の教員の指導方法や指導内容に触れることができるのは、非常に貴重な機会です。私自身、毎年、シャカリキフェスティバルに参加するたびに、「こういうアプローチで、このテーマの論文が書けるんだな」とか、「こういう段取りなら、ここまでの成果をだせるのか」など、自分の卒業研究の指導へのヒントを多く得ています。このように、シャカリキフェスティバルは、学生の「社会学の力」だけでなく、教員の「社会学を教える力」を鍛えるのにも大事な機会になっています。

来年度はグローバル・データサイエンスコース(GDS)の４年生の卒業研究が発生し、もしかしたら「卒業活動」の発表が、シャカリキフェスティバルでもみられるかもしれません。そうした変化にも対応しつつ、基本的な性格をひきついで、来年度以降も、安定してシャカリキフェスティバルが開催されることを祈りたいと思います。

2019 年度シャカリキフェスティバル発表タイトル

A 会場：卒業論文（1101 教室）

意識と社会 司会：針原素子	A1	高校生の自己と他者への認識における性差
	A2	人はなぜ行列に並ぶのか
	A3	レスポンス・スタイルにおける日本の特異性――国際比較調査に基づく潜在構造分析
趣味と習いごと 司会：安藤丈将	A4	プロ野球人気の復活と女性ファン――観客の女性比率から見る集客の安定化
	A5	変化する「手芸」
	A6	茶道からみる男女の習い事に対する意識の違い
エンタメ／カルチャー 司会：粉川一郎	A7	アイドル化する社会――合成音声ソフト UTAU の事例から
	A8	『うたプリ』からみる「声優ライブ」の社会学
	A9	ヴィジュアル系ロックバンドの新たな類型――ゴールデンボンバーの事例から

B 会場：卒業論文（1001 教室）

コミュニティと出会い 司会：林玲美	B1	唯一無二の商店街――巣鴨地蔵通り商店街
	B2	産直ネットアプリは農家と消費者をつなぐのか――ポケットマルシェを事例に
	B3	人々が「音楽フェス」に求めるもの
ジェンダーとセクシュアリティ 司会：千田有紀	B4	同性カップルにとっての結婚式――同性愛の承認と発信
	B5	女子小中学生向けメディアにみる「理想の身体」――彼女たちはいつから他者の視線を気にするようになるのか
	B6	キャバ嬢というファンタジー――疑似関係におけるセクハラの「代償」
よりそう・支える 司会：菊地英明	B7	日本の戦争記憶を伝える――口承伝達と広島の平和教育から
	B8	病弱教育教師の子どもの見方――病気の子どもとは一体どのような存在か
	B9	セルフヘルプ・グループにおける専門職の関与とその課題―入院病棟を拠点とする小児がん患者支援団体の活動を事例として

C 会場：卒業論文・卒業制作（1002 教室）

リアルとヴァーチャル 司会：南田勝也	C1	「ひとりぼっち」に対する意識とソーシャルメディア利用の関係
	C2	YouTuber 出現による文化の変化と今後の展望
	C3	「第二の身体」としてのアバター――現実の身体の体験とアバターの経験の相互共有
表現を磨き味わう （卒業制作） 司会：小田原敏	C4	「想像力をつけよう」――メディア・リテラシーを学ぶ教材
	C5	「ホスくんのこと」のこと
	C6	秘色のセレファイス――フィクションとノンフィクションの差異について
映像の可能性 （卒業制作） 司会：中橋雄	C7	音がきこえてくる世界
	C8	人をつなげる地域の伝統――東京高円寺阿波おどりの今と未来

2. グローバル化への取組み

2-1. 武蔵大学とロンドン大学とのパラレル・ディグリー・プログラム（PDP）

経済学部教授　古瀬 公博

１．2019 年度の状況

PDP は 2019 年度に５年目を迎えた。2016 年に入学した１期生のうち２名が最終年度の試験にも合格し、ロンドン大学の学位を取得することになった。１年次の IFP (International Foundation Programme)に進んだ１期生は 19 名いたが、そのなかで粘り強く学習を続けることができた２名が学位取得の栄誉に授かることができた。私はプログラムの中で組織論（Organisation theory: an interdisciplinary approach）を担当しているが、微力ではあるものの学位取得に貢献することができたことに安堵感を覚えている。

２．プログラムにおけるジレンマ

これまで私が PDP での授業を担当して感じたプログラム特有の課題についてここでは指摘したい。

PDP では、ロンドン大学が試験を作成・採点し、その点数をもって、履修生の成績が評価される。最終的なアウトプットである試験の点数のみで評価されるのである。このような評価・監督方法を経営学の用語ではアウトプット・コントロールという。それに対して、学習に対する取り組みそれ自体を評価することをプロセス・コントロールという。PDP 科目の武蔵大学における単位に関しては、クラスに対する貢献度も評価されるので、プロセス・コントロールの要素を含んでいる。

履修生にとっての学習の第一目標は、ロンドン大学の学位取得であるため、その試験をパスできるかどうかに注意が向けられやすい。そのため、各教科を学ぶことを通じて知的な刺激を得ることよりも、テクニカルに試験をパスすることに意識が向いてしまう履修生は少なくない。また、試験に通過することが目的とされるため、必ずしも高い得点をとるために最大限の努力をするのではなく、試験の通過に必要な点数だけ取ればよいと考えている者もいる。このような学生に対して、科目を学ぶ本来の意義に目を向けさせつづけることは、教員にとってひとつのチャレンジである。

また、シラバスはロンドン大学が作成したものであり、その内容をもとに試験問題もつくられるため、教員としては、教育上必要であったとしても、そのシラバスから逸脱しにくいという制約がある。限られた授業回数の中で、シラバスの内容から大きく離れることは難しいけれども、可能な限り、科目特有の面白さを伝えるためにも工夫を続けていきたい。

ロンドン大学という第三者が履修生の学びの成果を評価することの意義は大きい。ただし、上に述べたような弊害もあるのも事実である。第三者による厳格な評価と、教育の自律性とのバランスを維持することが、プログラムの質を高めるうえで避けられない課題である。

2-2. GSC English I – AY2019 FD Report

Faculty of Humanities
Assistant Professor Marie Nitta

AY2019 is the third year of the Global Studies Course (GSC) at Musashi University. The fundamental structure of the GSC English I course this year was the same as the past two years, but I made some modifications to meet the personalities, abilities, and needs of the students. In this report, first I give an overview of the course structure and contents. Next, I describe my teaching experience during the course. Finally, I outline points I noticed the students struggled with and suggest possible improvements for future reference. While maintaining student motivation is one of the biggest challenges in this course, I think that providing GSC-related course materials, joint class sessions, and multiple assessments could contribute to the academic success of first-year GSC students.

GSC English I Experience in AY2019

With the goal of preparing first-year GSC students to use English in academic settings, this course offered opportunities to learn the four foundational English skills--listening, speaking, reading, and writing. The freshman cohort of the GSC in AY2019 was thirty students; they were divided into two groups (Group A and B) and taught by me and Professor Nakamura, respectively. In the first quarter and the second semester (the first-year students participated in the study abroad program during the second quarter), each class of fifteen students met four times a week with the same instructor. In the second semester, the two classes had opportunities to work together on activities to practice speaking such as skits, debates, and group presentations based on their research papers. Similar to last year, we themed the activities of these joint sessions around global social issues, including economic and education disparities, affirmative action, free speech, and food and environmental issues.

The selection of the course materials for my class was made based on the global social topics used for the joint sessions in the second semester. This helped students to learn about particular topics deeply, and some even utilized the materials for their research papers. For my class, I used Laurie Blass and Jessica Willams's *21st Century Reading: Creative Thinking and Reading with TED Talks 4* and Keith S. Folse and Tison Pugh's *Great Writing 5: From Great Essays to Research*, both published by Cengage Learning. Besides the two main textbooks, various kinds of reading and listening materials including pieces of literature, newspaper articles, academic articles, radio programs, and documentary films were provided.

Great Writing 5 has been used in GSC English I since AY2018 for teaching writing academic essays and research papers. This textbook covers the basic structure of the English writing, the four different types of essays (process, comparison, cause-effect, and argument essays), and how to write research papers. The chapters on the four different types of essays each explain the structure of each particular essay type, which feels a little repetitive. However, I realized that it is nearly impossible to put too

much emphasis on the structure of English writing, especially the importance of the thesis statement, in any basic English writing class. In that sense, this textbook is a good introduction to academic English writing for GSC students.

I plan to use the same textbook next year, but several changes should be made to use it more effectively. First, I plan on utilizing the grammar activities in the latter half of the textbook and in the appendix more thoroughly. I noticed several common patterns of grammatical weaknesses in students' writings this year such as article and subject-verb agreement, so it would be a good idea to spend more time on that topic. Secondly, I think more attention should be given to teaching citation style in this class. The idea of citing other sources and adhering to a particular citation style was a whole new concept for the students. Some students felt these practices challenging. Since this textbook is mainly based on the APA style (although it mentions several other styles used in academic writings), I instructed the students to use the APA style in their research papers. Furthermore, if there was consistency in citation styles from the first year through the capstone project, it would cause less confusion among the students.

The other textbook, *21st Century Reading,* was newly introduced to GSC English I this year. I used this textbook mainly for two purposes. First, it provides students with the models for presentations and public speaking. This textbook was created based on real TED Talks given by key figures in various fields, including Bono, activist/lead singer of the rock band U2, and J.J. Abrams, director of *Mission: Impossible III* and recent *Star Wars* installments. By closely analyzing these public talks, students were able to learn important presentation skills such as speech delivery, the effective use of visual aids, and the appropriate amount of text to include on presentation slides. Second, this textbook covers various topics, which are highly relevant to the issues studied within the GSC. The readings and TED talks in the textbook provided students with basic information and vocabulary on the subject matter and, more importantly, multiple angles to analyze these issues critically. Such critical thinking skills acquired from the reading and listening sessions were exemplified in the joint class skit and debate activities. Depending on the subjects we will choose for these activities in AY2020, this textbook or a similar one that provides not only listening and reading materials, but also GSC-relevant contents would be desirable as an additional textbook.

Challenges and Efforts to Meet Them

As Professors Morrison and Nakamura mention in their AY 2018 FD report, I also observed that although the students were relatively highly motivated in the beginning of the course, their motivation seemingly declined because they were overwhelmed by the amount of work in the GSC in general and the unique course structure of English I (i.e., meeting four times a week). However, since we added more joint sessions compared to last year, it seemingly served to sustain student motivation in this cohort. As per the request from students, we made small working groups for each activity within each class, which created comradery among students in each class and even aroused rivalry between Groups A and B. From my eyes, these class dynamics seemed to contribute to keeping students actively participating in class activities and encouraged completion of assignments in a timely manner. In addition, there was a gap

among the students in terms of English abilities and their experiences of using the language. The students themselves were well aware of this fact because such differences were quite apparent in class discussions and peer-review sessions. To maintain the motivation of all students regardless of incoming English ability, one possible solution, which I employed more actively in the second semester, would be to prepare multiple criteria to more comprehensively evaluate different abilities and efforts. Several years are likely needed to adequately assess such possible solutions and adjustments to overcome the challenges in this course; however, I hope these efforts will contribute to the overall academic success of students in this program.

2-3. グローバル・データサイエンスコースの特徴ある授業について

社会学部教授　粉川 一郎

＜はじめに＞

グローバル・データサイエンスコース（GDS）は、社会学部が 2017 年度から開設をしている、英語力とデータサイエンススキルの向上を目的とした新しいプログラムです。これからの国際化時代に必要不可欠な英語力はもちろんのこと、エビデンスベースで物事を考え、判断をできるような人材を育成するという視点でデータサイエンスの素養を持った学生を育成していくことは非常に重要なテーマとなります。文系の学部でこうした取り組みを行うことは全国的にも非常に珍しく、武蔵大学の社会的なプレゼンスを高めていく上でも大切な取り組みと言えるでしょう。本報告では、その先端的な GDS のプログラムの中でも、特徴的な内容の一つ、データサイエンス特別講義についてお伝えします。

＜データサイエンス特別講義＞

データサイエンス特別講義は、今の社会でデータサイエンスという手法が、実際にどのような課題解決につながり、社会の中で機能をしているのか、について学ぶために設置されている授業です。カリキュラム検討当初から、この科目はアカデミシャンが理論について語るものではなく、社会の中で最先端の課題解決をデータサイエンスという手法を用いて実践している「現場」の方にお願いすることを前提としていました。そうした姿勢に御共鳴をいただき、学園経営陣の方々のご協力のもと、2018 年度よりこの授業は日本ユニシス株式会社様との協働という形で授業を実施しています。学部教育の現場と学園経営陣との協力で実現したこの日本ユニシスとの協働は、その成立形態からもユニークな授業の一つと言えるのではないでしょうか。

＜日本ユニシス株式会社様との連携＞

この授業の担当者は、日本ユニシス OB であり、同時に多数の大学でデータサイエンス関係の授業を担当し、客員教授等も務められた方を特別招聘教授としてお迎えし、全体の授業設計と運営をお願いしています。授業は半期 15 回から構成されていますが、その前半では経営戦略、人事、マーケティング、オペレーションといった分野でのデータ分析の在り方、そして新しいデータ分析技術として、ベイズ統計、機械学習といったテーマについて学んでいきます。そのうえで、実際の事例として、日本ユニシス株式会社様から現場で働かれている社員の方にお出でいただき、事例についてお話をいただいています。その中には、コールセンターにおける対話の応答部の分析であったり、人工知能（AI）を用いた分析といった学生が興味を引かれる現場の実践に関わる内容が満載です。特に 2019 年度は、ほぼすべての授業に日本ユニシス株式会社様の社員の方にゲストとしてお出でいただいており、より現場との連携が密接に行われています。

授業そのものは講義形式をとっていますが、比較的小規模の教室を用いて積極的な質疑応答を交えながら行われています。授業に参加していただいている日本ユニシス株式会社様の社員の方からも、「学生がこんなに積極的に関心を持ってくれるとは思わなかった」と驚きの声をいただいています。

＜今後に向けて＞

外部企業との連携、特に人的なご負担をかける形で実施しているこの授業は、連携していただいている企業様のご厚意で成立しています。他の企業様との連携授業もそうですが、本学が本学学生のメリットばかりではなく、パートナーさまにとってこの授業にご協力いただくことの価値がどこにあるか。そうした点に留意しながら授業を設計、運営していくことが肝要かと思いま

す。こうした点は大学人にとっては不得手な分野でもあると思われますが、学園経営陣とも連携しながら、より良い形を模索していくことが必要になると考えられます。

3. その他の特色あるゼミ科目

3-1. 専門ゼミナール第１部、第２部(経済学部)

１．プロジェクトの概要

目時ゼミナールでは、企業や自治体などと協働して社会的課題の解決を行うことを目的とした産学官連携プロジェクトを実施している。今年度は一般社団法人日本自動車連盟（以下、JAF と略)、および東京都あきる野市にご協力いただき、あきる野市の地方創生に関する課題発見とその解決策の提案をテーマとしてゼミ活動を行った。本プロジェクトには、専門ゼミナール第１部の学生５名と専門ゼミナール第２部の学生３名が参加した。プロジェクトの開始にあたって、まずはあきる野市における観光政策ならびに現状について担当者から説明をいただき、その後、あきる野市が取り組むべき課題は何かを明らかにすべく、内閣府が提供する地域経済分析システムである RESAS（https://resas.go.jp/）や観光白書等の情報に基づいて分析を行った。その結果、①冬場の観光客の伸び悩みと、②林業の低迷の２点に大きな課題があることが明らかとなり、これらについて解決案の提案を行うこととなった。提案の妥当性と実行可能性を検討するために、フィールドリサーチも複数回実施している。提案内容については、JAF 本社を会場として中間報告会および最終報告会を実施するとともに、内閣府主催の地方創生政策アイデアコンテスト 2019（https://contest.resas-portal.go.jp/2019/）に本プロジェクトに関する提案書を提出した。

２．プロジェクトの成果

産学官連携プロジェクトへの参加は、様々な教育的効果をもたらしたと考えられる。第一に企業や自治体などの実務家と接点を持ちながらゼミ活動に取り組むことで、学生の学習意欲が高まり、ゼミ外での学習時間が大きく伸びたことが挙げられる。提案書をまとめるために必要となる文献を自ら収集し、国会図書館や他大学の図書館なども活用しながら調査を行っていた。また、普段、ゼミで学んでいる管理会計や経営学に関連する知識を実務にどのように応用しうるか考えながら提案内容を検討しており、理論知をどのような形で実践知に落とし込むかを経験的に理解するための重要な機会となったと言えよう。第二に、プレゼンテーション能力およびディスカッション能力の高まりが挙げられる。提案内容の趣旨を的確に伝えるために、JAF やあきる野市で報告を行う前段階でゼミ内外での発表練習を繰り返し、資料の改善を行った。また、実務家とのディスカッションを経験することで、ディスカッションの進行方法や、論点整理の能力が飛躍的に高まったと考えられる。

以上のような成果がみられた一方で、複数の組織による連携プロジェクトゆえの問題点も表出した。提案後の実証実験の段階で、それぞれの組織における決済に時間を要し、スケジュール通りにプロジェクトが進行しないなどの問題も生じた。これらの問題点については次年度以降のプロジェクトを通じて克服していきたい。

3-2. Applied Linguistics (人文学部)

Faculty of Humanities
Professor　Jason Hollowell

Applied Linguistics is often described as the practical branch of linguistics through which scholars and researchers analyze language related issues that occur in the world. Through this process, a better understanding and heightened sense of awareness of the multitude of language related issues that exist in the word is developed and proposals for solutions can be made. In this 2019 section of Applied Linguistics, students explored a variety of topics of interest together with their peers and subsequently worked to gather preliminary information from academic research papers and books. With a goal of identifying a research topic, to be presented upon twice in the first semester, this class of thirteen students divided themselves into four groups each focused upon a self-negotiated topic. The four content topics selected in the first semester were: bilingual education, ASL (American Sign Language), personality shift in second language speakers, and the impact of L1 (first language) phonology (pronunciation) on L2 (second language) pronunciation ability. Each group was required to give a preliminary, mid-term, oral report introducing their topic and summarizing the information they had been able to gather to that point. Groups then closed out the first semester with a final presentation summarizing their findings and outlining the research they planned to conduct in the fall semester. The following are a few highlights from the first semester final presentations.

The group focusing on bilingual education began by exploring the definition of bilingualism adopting the rather broad definition, a "person who can use two languages equally well." They followed with a discussion of different types of bilingualism including simultaneous bilingualism, compound bilingualism, and coordinate bilingualism. While struggling somewhat with the different conceptual frameworks for bilingualism, they proceeded with an ambitious questionnaire and reported their findings, obtained from 123 "English proficient" respondents.

The group investigating ASL gave a thorough presentation introducing the history of American Sign Language and Thomas Gallaudet, the founder of the American School for the Deaf and location where ASL originated. Following the history briefing, this group spent some time with the linguistic aspects of ASL, introducing some of its phonemes represented in hand shapes, locations, movements and orientations. They also explored lexical and syntactic features of ASL and finished with a broad statement about the status of ASL users in society today.

With a strong interest in exploring the impact a second language has upon the personality of its speaker, the third group spent considerable time searching for research on their topic. They summarized one research report that had surveyed 241

native Japanese speaking second language English speakers finding that 80% of the respondents reported a feeling of personality shift when speaking English. The results of their investigation confirmed their own personal observations of feeling very different when speaking English compared to how they felt when using Japanese.

Determining how their first language might impact their pronunciation skill in English was of particular interest for the fourth group and they began their final presentation, most appropriately, by introducing the concept of linguistic distance. They found that being in an isolated language family, Japanese did not enjoy similarities with other languages in the same way that other languages, such as Germanic languages, do. After introducing and discussion phenomena such as stress-timing versus syllable-timing and syntactic ordering (SOV vs SVO), this group introduced a small fieldwork experiment they conducted using an application called Hello talk. While their participant size was low, they were intrigued to find that respondents from European linguistic backgrounds reported their English learning process to be relatively easy while those from the Philippines, Turkey, and Japan reported significant difficulty in learning English.

Seminar classes, under my supervision, are typically administered such that students receive a maximum of freedom to explore personally motivating topics. Often students choose to continue, into the fall semester, with the topic they selected in the spring. In so doing, they are able to further deepen their knowledge and often simultaneously to conduct a mini-research project. For this second semester of Applied Linguistics seminar, somewhat surprisingly, all four research groups both reorganized their membership and also selected new or refined topics for the fall semester. They were: investigating the impact of bilingualism on the onset timing of dementia, research into textbook design for second language teaching programs, analyzing the linguistic features and sociolinguistic nature of advertising texts, researching the underlying causes of and therapies for stuttering. A brief summary of each project follows.

One of the four research groups in the fall spent considerable time navigating through extremely high-level academic research papers that summarized research on dementia and the influence of bilingualism on dementia onset delay. This group's final presentation summarized research that points toward some type of correlation between bilingualism and a delay in dementia onset but they were careful to note that, to date, the exact relationship between the two is uncertain. From a very detailed explanation of the amyloid beta plaques present in the brains of Alzheimer's patients, to a general call to learn a second language, the presentation was informative and entertaining.

The second group presented on textbook design for English language education in Japan with the goal of incorporating knowledge about second language education into the materials with which students have the most sustained contact. This group did an impressive job of incorporating Stephen Krashen's perspectives on language acquisition into their mock design of a textbook that focused on presenting natural language instead of prescriptively constructed textbook language.

The third group gave a final presentation titled “Comparative Studies of Advertisement in Japanese and English” in which they introduced and highlighted the various strategies and linguistic techniques used in advertisements to catch consumers’ attention and to persuade them, via the use of linguistic suggestion and manipulation, of the appeal for their product. They devoted time to interesting research that outlined differences displayed between advertisements in the U.S., focusing on the individual, and those in Japan, which placed more emphasis on a collective group.

The final group presentation summarized the unique topic of stuttering with emphasis upon the neurological underpinnings of stuttering and various medical intervention methodologies. Famous individuals who have struggled with stuttering were introduced and methods for overcoming stuttering blocks such as choral speech, shadowing, and mid-speech alternation were introduced and demonstrated.

The variety of topics selected by students and depth to which they were able to investigate confirms the efficacy of an approach that can sometimes feel excessively unstructured and chaotic. Going forward, I hope to be able to continue to successfully encourage students to proactively search for, critically analyze, succinctly summarize, and subsequently internalize information available to them as they embark on the path of becoming lifelong learning members of society.

3-2. メディア社会学専門ゼミ（社会学部）

社会学部教授　松本 恭幸

地域メディアと地域づくりをテーマにした社会学部メディア社会学科松本ゼミ（３年）では、前の年の秋にゼミ募集を行って選考した 15～20 名の学生達が、少人数のグループに分かれて教員も同行し、国内（過去にはインドネシア、台湾等の海外も）各地へフィールドワークに出かけ、そこで取材したことをネットのニュースサイトの記事や CATV 局（過去には衛星放送も）の番組にまとめて配信しています。

2019 年は、正式にゼミの始まる前の春休み期間中の２月に、辺野古米軍基地建設のための埋立ての賛否を問う県民投票を取材するため５泊６日で沖縄に出かけ、24 日（日）の県民投票当日に、建設予定地に隣接する米軍キャンプ・シュワブのゲート前で抗議活動を行う市民の方と、那覇市内で投票に行った市民の方に取材して、その声を拾いました。またその前後に、辺野古米軍基地建設問題を取材している琉球新報、沖縄タイムスの地元２紙を訪問し、現場の記者の方にお話を伺いました。

この沖縄でのフィールドワークを皮切りに 2019 年には、計 14 回、延べ 33 日間のフィールドワークに出かけました。

２月：沖縄（５泊６日）
３月：愛媛（２泊３日）
４月：岡山（２泊３日）、鳥取（２泊３日）、神奈川（１日）
５月：山梨（１日）、茨城（１日）、新潟（２泊３日）、長野・群馬（３泊４日）
７月：鹿児島・宮崎（１泊２日）
10 月：神奈川（１日）、都内（１日）×２回、奈良・大坂・和歌山（２泊３日）

そしてフィールドワークでの取材先は、４月の岡山取材では瀬戸内市にある国立ハンセン病療養所「長島愛生園」のような施設も取材しましたが、主な取材先は地域の様々な課題に関する情報が集まる地域メディアで、図書館、博物館のようなスペース系メディアも含め、下記の 34 カ所の地域メディアを訪問取材しました。

●新聞
琉球新報（沖縄）、沖縄タイムス（沖縄）、愛媛新聞（愛媛）、山陽新聞（岡山）、新潟日報（新潟）、市民タイムス（長野）、紀井民報（和歌山）
●出版
ボーダーインク（沖縄）、おきなわ食べる通信（沖縄）、NPO 法人本の学校（鳥取）、モテコ（群馬）
●CATV
中海テレビ放送（鳥取）、LCV（長野）、近鉄ケーブルネットワーク（奈良）
●コミュニティ FM
FM ピッカラ（新潟）、エフエムとおかまち（新潟）、あいらびゅーFM（鹿児島）、ラジオフチューズ（東京）
●地域ポータルサイト

NEWS つくば（茨城）、てげてげ通信（宮崎）、ヨコハマ経済新聞（神奈川）、Cwave（東京）
●図書館
瀬戸内市民図書館もみわ広場（岡山）、山中湖情報創造館（山梨）、小布施町立図書館まちとしょテラソ（長野）、奈良大学図書館（奈良）、まちライブラリー＠もりのみやキューズモール（大阪）
●博物館
中越メモリアル回廊（長岡震災アーカイブセンターきおくみらい、おぢや震災ミュージアムそなえ館）（新潟）
●デジタルアーカイブ
沖縄アーカイブ研究所（沖縄）、上田マルチメディア情報センター（長野）
●自治体関係（広報、シンクタンク）
松山市シティプロモーション推進課（愛媛）、公益財団法人えひめ地域政策研究センター（愛媛）
●ＮＰＯ／ＮＧＯ関係
ＮＰＯ法人湘南市民メディアネットワーク（神奈川）

そして取材したことを学生達の方で、CSR 専門誌『オルタナ』が運営するニュースサイト「オルタナＳ」、奈良県全域と大阪府の一部を放送エリアとする近鉄ケーブルネットワーク／こまどりケーブルで、それぞれ 30 数本の記事と映像番組にまとめて配信しました（学生１人が年間で記事と映像、それぞれ１～２本を執筆・制作）。ちなみに「オルタナＳ」に書いた記事は、「Yahoo!ニュース」を始めとするいくつかのニュースサイトにも転載されます。他に依頼のあった山陽新聞にも、学生が記事を書いています。

またこうしたフィールドワークを通して学んだ地域メディアの抱える様々な課題について、記事や映像番組にするだけでなく、各分野の専門家の方とのトークを通して検証するため、2019 年 10 月 31 日に「Yahoo!ニュース」の協力を得て、ヤフーの運営するオープンコラボレーションスペース「LODGE」で、「地方紙の未来を考える…ローカルジャーナリズムの担い手の行方」という公開トークイベントを、学生が司会進行役兼報告者となり、東京新聞／中日新聞や中国新聞の記者、電通メディアイノベーションラボの研究主幹や「Yahoo!ニュース」のプロデューサーを討論者に招いて開催しました。

さらに 2019 年 11 月 23 日に東京の足立区で開催された「あだちメディフェス 2019」でも、地方出版と地方図書館をテーマに調査研究の成果を報告しました。

こうした全国各地での地域メディアと地域づくりの様々な取り組みに関するフィールドワークとその（ネットのニュースサイト、CATV、トークイベント等を通した）報告以外、もう一つゼミの活動の柱となるのが、企業、自治体と提携した地域の課題解決のための産官学連携プロジェクトです。

2019 年は長野県小谷村、チームラボ・セールス、モリサワと提携して、松本ゼミの学生が小谷村のオフシーズンの観光プロモーション（特に若い世代の観光客を、冬のスキーシーズン以外の時期に、どのようにして小谷村に来てもらうのかについて企画）について、現地を調査して学生の視点からまとめたプランを、村長を始めとする村役場の職員に提案するプロジェクトを実施しました。実施に際しては、小谷村が現地で調査を行う松本ゼミの学生達の交通費・宿泊費の負担と現地での調査のコーディネートを行い、チームラボ・セールが学生達でプレゼンを行うのに必要なビジネス企画書の書き方を指導し、モリサワがＤＴＰのフォントを提供して企画書のデザイン、レイアウトについて指導しました。

学生達は５月に小谷村を訪問して、現地で２日間、小谷村の観光関係者に調査し、その調査結果を持ち帰って１カ月かけてオフシーズンの観光プロモーションについて企画書を作成し、６月に小谷村を再訪し、２日間かけて村長を始めとする村役場の職員へのプレゼンや観光関係者との意見交

換を行いました。そしてこの企画プレゼンの中で提案された小谷村の雨飾高原キャンプ場スナップコンテストは、実際に 2019 年夏のシーズンに実施されました。また夏休み期間中は、11 名の学生が有給のインターンで小谷村に行き、雨飾高原キャンプ場を拠点に小谷村の観光の魅力について取材し、それをネットで発信する取り組みをしました。

他にもゼミの学生達は、教員の紹介で、沖縄のコミュニティ FM 局の FM よみたん、宮崎の CATV 局の BTV、鳥取の CATV 局の中海テレビ放送等の地域メディアにインターンに行ったり、オルタナと社会の広告社とが共同で大学生向けに企画した、ソーシャルイシューの現場を体感する「ソーシャルステイ」プログラムに応募して、社会福祉の現場を取材して記事にする学生ライターとして活動したりしました。

このようにほとんど全てのゼミの学生が、フィールドワーク以外に自治体、企業との産官学連携プロジェクトや春・夏の長期の休みの間のインターンを通して社会経験をする中、就活の方向について絞り込みを行い、秋からはヤフー、IIJ、インテック、チームラボ・セールス等のＩＴ関連を中心とした企業に就職したゼミ OB が、メンターして学生の就活の個別指導を行っています。

こうしたゼミでの経験値をベースにした就活で、ほぼ全ての学生が４年次の５月までには就活を終え、６月からは３年次に行った全国各地でのチームでのフィールドワークの経験を踏まえて、今度は個人で全国各地に出かけ、そこでのフィールドワークをもとに地域の抱える様々な課題について卒業論文・卒業制作に取り組んでいます。

2019 年 10 月 31 日のヤフーでのトークイベントの様子